学生テニス競技における団体戦の勝利を構成する要因についての一考察

三　橋　大　輔

A study on the factor which constitutes the victory of the team event in a collegiate tennis

Daisuke MITSUHASHI

Although tennis is an individual event, it is prosperous also as a team event. A team event has many upsets and it is expected that the factor of not only a player's records but others is involving.

The purpose of this study examines the factor which constitutes the victory of the team event of collegiate tennis, and is creating useful data for production of the tennis team.

The object of examination is the division II of the team event of the intercollegiate tennis of the Tokai area in the 2003 which the Tokai collegiate tennis league sponsors. The division II was taken up because there was an upset which cannot win the victory but becomes the lowest grade in T university expected to be a top favorite from the result of an individual match. This team event is round robin for which consists of each division 4 universities and it fights by 9 points of each meet.

The result of all meets, information which the writer acquired at the match hall, and the information acquired by the interview to several students of T university who have offered the upset were used for examination.

The main results were as follows:

(1) Experience as the individual and team which are not overawed by atmosphere peculiar to the team event in tennis is required.

(2) It is required for a fourth grader to lead a team not by the bench coach or cheering but by participating as player and contributing to a victory.

From these points, as factors other than the ability of the player for winning a team event, it was suggested that it is required for a fourth grader to lead a team as a player, and need a experience of a player and a team.

緒言

テニスは個人競技であるが、国を代表して戦うデビスカップ（国別対抗の団体戦）に代表されるようにシングルス、ダブルスを複数用いた団体戦もおこなわれている。日本国内においては全国中学校選手権、全国高等学校選手権、全日本大学対抗王座決定試合と学校単位での団体戦が盛んであり、個人戦同様各校団体戦での勝利を大きな目標として掲げている。

それら団体戦はとかく「番狂わせ」が多く、個人戦の戦績が反映されない場合が多い。デビスカップにおいてさえ、個人戦ランキング上位選手を多数擁する国が、ランキングの低い選手が主力の国に負けることはしばしばある。このことからテニス競技における団体戦の勝利は、各選手の力量以外の要因も多分に影響していることが考えられるが、それに関する資料はほとんど見られない[1, 2]。

特に全日本大学対抗王座決定試合を頂点とする学生テニス競技の団体戦においては、男子の場合ダブルス3ポイント、シングルス6ポイントの合計9ポイントで争われ、全国中学校選手権（ダブルス2ポイント、シングルス3ポイント）や全国高等学校選手権（ダブルス1ポイント、シングルス2ポイント）に比べると国内の団体戦形式として最多のポイント数であるのをはじめ、個人戦との相違点が多い。これらの中に各選手の力量以外の要因が見出せるかも知れない。

そこで本研究では団体戦を勝抜くのに必要な、選手個人の力量以外の要因を探り学生テニスチームづくりの現場において役立つ資料を作成することを目的とした。

方法

1．対象

東海学生テニス連盟が主催する、平成15年度東海大学対抗テニスリーグ（以下リーグ戦）における男子第2部を対象とした。このリーグ戦は各部4大学で構成され、各対戦9ポイントで争われる総当たり形式の団体戦である。

この男子第2部については、個人戦の戦績から優勝候補と目されていたT大学が優勝はおろか最下位になるといった「番狂わせ」と言える結果が生じたために取り上げた。

2．各大学のプロフィール

表1に、各大学の戦力をまとめた。東海学生ではリーグ戦直前に春季東海学生選手権がおこなわれ、その結果で各大学のある程度の戦力が判明する。この表はその春季東海学生の結果を基に作成した。

	NF 大学		C 大学		T 大学		NZ 大学	
	シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス	シングルス	ダブルス
	氏名　戦績	氏名　戦績	氏名　戦績	氏名　戦績	氏名　戦績	氏名　戦績	氏名　戦績	氏名　戦績
4 年生	Y　2 R M　1R		O　1R				T　2R St　1R	T　2R St　2R
3 年生	K　1R H　3R	F　1R	I　2 R S　5R	S　3R W　1R	Sz　1R N　2R	Sz　1R In　1R N　2R	Sz　2R Sk　1R	Sz　4R
2 年生				K　3R Sg　1R	St　3R Iw　1R F　1R	Iw　2R St　4R F　4R	It　2R	It　4R
1 年生	I　1R	I　1R	Og　4R		K　1R S　2R	S　2R K　2R		
本戦出場者数	5	2(1ペア)	4	4(2ペア)	7	8(4ペア)	5	4(2ペア)
春季最高戦績	3R (ベスト16)	1R (ベスト64)	5R (ベスト 4)	3R (ベスト 8)	3R (ベスト16)	4R (ベスト 4)	2R (ベスト32)	4R (ベスト 4)
春季以前の特筆すべき戦績			S：14 年度夏季東海学生シングルスベスト 8 14年度東海学生室内シングルスベスト 8		St •F ペア：14年度夏季東海学生ダブルス優勝 N•Iw ペア：14年度東海学生新進選手権ダブルス優勝 F：14年度東海学生室内シングルス準優勝			
チームの特徴	昨年度第 1 部から降格。飛び抜けた選手はいないものの、3、4 年生を中心に各選手の戦績が拮抗している。		昨年度第 2 部 2 位。絶対的なエース S（3 年生）を軸とし、2、3 年生が主力。18年前に全日本大学王座対抗選手権準優勝の実績を持つ。		昨年度第 2 部 3 位。2 年生 St、F を中心とした、1、2 年生が主力のチーム。創部 9 年目であり、唯一第 1 部の経験なし。		昨年度第 3 部から昇格。ジュニア時代に優れた戦績を持つ選手が多い。3、4 年生が主力のチーム。40 年前にリーグ戦第 1 部に優勝の実績を持つ。	

表 1.　リーグ戦直前の春季東海学生選手権（個人戦）戦績を基にした各大学の戦力分析

＜NF 大学＞

昨年度第 1 部から降格。実力の拮抗した 3、4 年生が主力であり本戦出場者数シングルスが 5 名、ダブルスが 1 ペアと 4 大学中もっとも少ない。しかしながら本戦出場選手以外にも有力選手が多く、また部員同士の仲が良く応援にも迫力が感じられ、個人戦よりも団体戦に強いという印象がある。

＜C 大学＞

昨年度第 2 部 2 位であるが、過去には全日本大学王座決定試合において準優勝という東海地区においては最高戦績の実績を持つ。本戦出場者数はシングルスが 4 本、ダブルス 2 ペアと多

くはないが、第２部の中では唯一個人戦のシングルスで常に上位へ食い込む絶対的エースＳ（３年生）がいる。加えて、即戦力のOgの入学で層が厚くなったと言える。

＜Ｔ大学＞

昨年度第２部３位。本戦出場者数がシングルス７名、ダブルス４ペアと第２部ではもっとも多く層の厚さは随一と言える。前年度に夏季東海学生ダブルスで優勝を果たしたSt、Ｆ（ともに２年生）を中心に、1、２年生が主力となっている。なお、唯一Ｔ大学は４年生の本戦出場選手が一人もいない。また創部９年目であり、Ｔ大学だけは第１部の経験が無い。

＜NZ大学＞

昨年度第３部から昇格したが、過去には第１部で優勝という戦績を持つ。Sz（３年生）、It（２年生）、新戦力Ｈ（１年生）はジュニア（高校生以下）時代に優れた戦績を持つ。その他は3、４年生が中心で、各選手とも実力が拮抗している。なお、Ｈは春季大会には出場していない。

各大学の戦力を総じて、戦績や選手層の厚さから見るとやはりＴ大学が優勝候補の筆頭であるのが大方の予想であった。

３．試合結果

表２にリーグ戦の対戦表および結果を示した。結果は、NZ大学が３勝０敗で優勝、次いでＣ大学が２勝１敗で２位、以下NF大学が１勝２敗で３位、そして戦前の予想に反しＴ大学が０勝３敗で最下位（４位）となった。

	NF大学	C大学	T大学	NZ大学	最終成績
NF大学		勝敗：×	勝敗：○	勝敗：×	１勝２敗
		S：1 - 2	S：3 - 0	S：2 - 1	
		D：2 - 4	D：5 - 1	D：2 - 4	３位
		計：3 - 6	計：8 - 1	計：4 - 5	
C大学	勝敗：○		勝敗：○	勝敗：×	２勝１敗
	S：2 - 1		S：2 - 1	S：1 - 2	
	D：4 - 2		D：4 - 2	D：2 - 4	２位
	計：6 - 3		計：6 - 3	計：3 - 6	
T大学	勝敗：×	勝敗：×		勝敗：×	０勝３敗
	S：0 - 3	S：1 - 2		S：1 - 2	
	D：1 - 5	D：2 - 4		D：2 - 4	４位
	計：1 - 8	計：3 - 6		計：3 - 6	
NZ大学	勝敗：○	勝敗：○	勝敗：○		３勝０敗
	S：1 - 2	S：2 - 1	S：2 - 1		
	D：4 - 2	D：4 - 2	D：4 - 2		１位
	計：5 - 4	計：6 - 3	計：6 - 3		

S　：シングルス
D　：ダブルス

表２．リーグ戦における各校の対戦成績

4．検討項目

Ⅰ．個人戦との相違点が及ぼす影響について

Ⅱ．学年別の戦力貢献について

上記の項目について、試合の結果や筆者が会場へ出向き観察することによって得た情報、さらにはＴ大学のキャプテンＭ（4年生）を含めたＴ大学の選手数名へのインタビューを実施し、「番狂わせ」を提供してしまった側からの見解を加えて検討をした。

結果および考察

Ⅰ．個人戦との相違点が及ぼす影響について

(1) 応援

表3に、個人戦と団体戦の相違点について記した。これらの中で、選手がもっとも大きな違いとして感じるのがプレイとプレイの間におこなわれるチームメイトからの応援である。個人戦は拍手のみであるのに対し団体戦では声での応援が加わる。この声での応援は、時折相手チームの選手に不快感を与えるような言葉が発せられるなど過剰な応援となり、問題を起こす場合があるほどである。これがリーグ戦独特の雰囲気を醸し出し、これによりペースを乱す選手も多い。Ｔ大学の選手は個人戦の結果では格下の相手に負けることが多かったが、特にリーグ戦初参加でこの雰囲気の中で初めてプレイし、1勝もあげることができなかった1年生ＳとＫは「相手チームの応援がうるさい。」「独特の雰囲気が気になった。」と告白している。

	個人戦	リーグ戦
会場	一箇所にて開催	ホーム＆アウェイで開催
応援	拍手のみで応援	拍手に加え声での応援
ベンチコーチ	なし	あり
周囲からの期待	あまり感じない	強く感じる

＜その他リーグ戦にのみ見られる事項＞
○試合前後に対戦校との間で開会式、閉会式がおこなわれる
○試合開始直前にチームで円陣を組みエールをかける
○全試合（9ポイント）終えるまで6～7時間と長時間にわたる。
○判定に対し質疑をすることができる
○閉会式後にチーム間でエール交換がおこなわれる

表3．大学テニス競技における個人戦と団体戦（リーグ戦）との相違点

(2) 周囲からの期待

また個人戦とは異なり、チームの代表として出場していることから周囲（チームメイト）からの期待も強く感じる。上記（1）でも述べたような応援に声が加わり時には過剰になるのは、

応援する側の期待の大きさの表れでもある。リーグ戦直前、T大学の中心選手であるSt（2年生）は練習中に怪我をし、リーグ戦全試合欠場を余儀無くされた。戦力ダウンは否めないが、T大学は選手層が厚く「代役」にB（春季は予選敗退をしたが昨季は本戦出場）を立て、キャプテンMも「Bの力量を考えれば十分勝つことができる。」と考えていたという。しかしながら、勝利をあげることはできなかった。出場したB（2年生）は、「代役」として「期待に応え勝たねばならない。」という心理的重圧を感じながらプレイをしていたと告白した。リーグ戦直前までレギュラーとして出場する準備をそれほどしていなかったBには、その重圧がさらに大きかったのだろう。

キャプテンMはこれら選手が思うような結果を残せなかったことについて、「やはりリーグ戦での経験不足だと思います。」と語った。

これら過度の応援、周囲からの期待はいずれも過度の興奮や緊張のために予期した通りにプレイができない状態、いわゆる「あがり」の原因(3)となりパフォーマンスの低下を招く可能性がある。これを払拭するには選手個人の性格も必要かも知れないが、その場に慣れる(3)、つまり団体戦でレギュラーとしてプレイした「経験」があればそれができたのかも知れない。T大学の場合、出場した選手の多くが1、2年生であったためにリーグ戦における「経験」については他大学より少なかったと言える。

(3) 個人ではなくチームとしての戦い

他の大学はいずれも第1部を経験し中には王座を経験するという、いわばチームとしての「経験」が豊富なチームである。現在在籍する選手が王座を経験していなくとも、チームとしての経験に培われ先輩達から受け継いできた「戦い方」が確立されているように思われる。その戦い方のひとつとしては、表3にも示したベンチコーチの働きである。チェンジコートの際、個人戦では認められていないアドバイスを90秒間において直接選手にアドバイスを授けることができ、チームのムードメーカー的存在でもある。このベンチコーチは各大学毎に特色があり強いチームほどうまく機能しているように感じられる。逆にT大学にはチームとしての「経験」が乏しく、ベンチコーチもそれほど機能していなかったように思えた。

これらのことから、独特な方式、雰囲気を持つリーグ戦で勝利を得るには選手個人およびチームとしての「経験」が必要であるのかもしれない。

Ⅱ．試合結果に見る学年別の戦力貢献について

図1には、各大学の全試合における出場選手の学年別の比率を示した。NF大学は1年生が27.8%、2年生が5.6%、3年生が41.7%、4年生が25%であった。C大学については、1年生が19.4%、2年生が41.7%、3年生が30.6%、4年生が8.3%であった。T大学は1年生が33.3

%、2 年生が 44.4%、3 年生が 22.2%、4 年生は 0%であった。そして NZ 大学については 1、2、3 年生がそれぞれ 16.7%、4 年生が 50%であった。

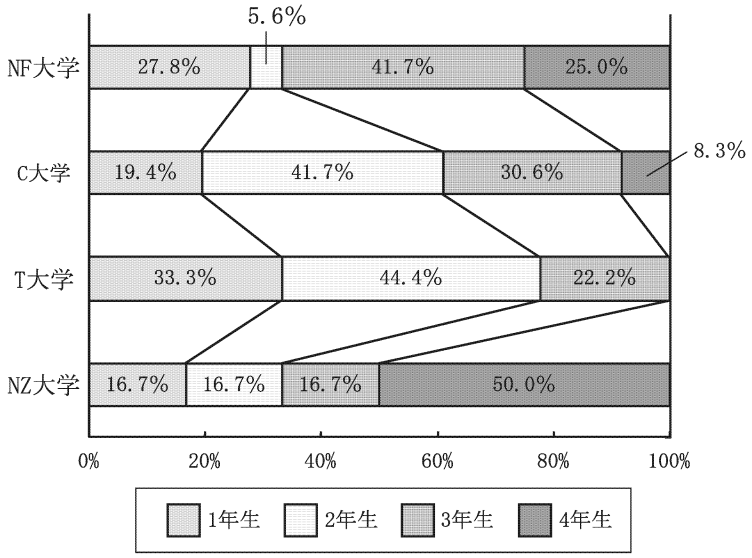

図 1．各大学の全試合における出場者の学年別比率

また図 2 には、各大学の全勝利試合における学年別の比率を示した。NF 大学は全勝利試合のうち、1 年生が 28.6%、2 年生が 4.8%、3 年生が 42.9%、4 年生が 23.8%それぞれ占めていた。C 大学は 1、2、3 年生がそれぞれ 30%、4 年生が 10%を占めていた。T 大学は 1 年生と 4 年生は 0 %、2 年生が 66.7%、3 年生が 33.3%であった。NZ 大学は 1 年生が 22.7%、2、3 年生が 22.7%、4 年生が 31.8%であった。

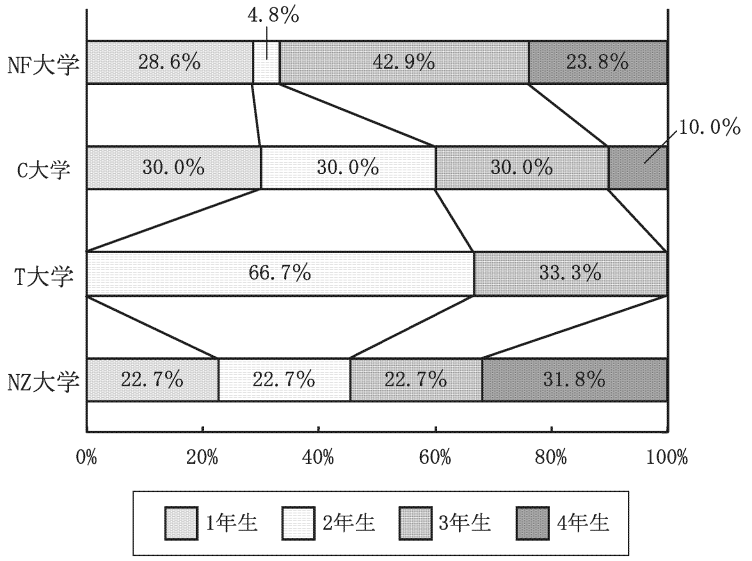

図 2．各大学の全勝利試合における学年別比率

出場選手の学年別の比率に関しては、第2部で優勝したNZ大学の4年生がもっとも高く、50%であった。NZ大学の場合、1〜3年生は各16.7%であり、4年生が中心となり各学年がバランスよく出場しているといえる。また、全勝利試合のうち、4年生が31.8%、他は1〜3年生でそれぞれ22.7%を占め各学年がそれぞれに勝利に貢献している。同様に、多少各学年の占めるバランスは異なるものの、NF大学、C大学ともに1年生から4年生までが試合に出場し、それぞれ勝利に貢献している。それらに比べT大学に関しては4年生が出場しておらず、故に戦力として勝利に貢献していない。加えて1年生が3割程度出場しているものの、1勝もあげることができていない。そういった点では、戦力バランスに偏りがある。

Kriese[1]が4年生の多いチームは成功する場合が多いとしているように、チーム内のリーダーである4年生の働きは大きく、その働きによりチームの雰囲気も大きく変化する。リーグ戦においては当然勝利することが目的であり、ベンチコーチや応援などのいわば裏方だけでなく、4年生自らが試合に出場し目的を達成するための雰囲気を盛り上げることは重要である。その点、NZ大学はキャプテンを中心に4年生が多く出場し勝利しており、またNF大学、C大学ともにキャプテンが出場し、自身が勝利した試合に関してはチームも勝利している。4年生が1人も出場できなかったT大学のキャプテンMは、「ベンチコーチとして雰囲気を盛り上げるのには限界が感じられた。自分がレギュラーを勝ち取り、試合に出場することが出来ていれば異なる結果に出来たかも知れない。」と語った。

これらのことからチームのリーダーである4年生がベンチコーチや応援だけで無く、試合にレギュラーとして出場し勝利に貢献することがチームの勝利につながる可能性が示唆された。

リーグ戦はその構造上「団体戦」であるが、その勝敗は「個人」の力量に起因する。しかしながら、それ以外の勝敗に大きく影響する要因として本研究の結果から以下のことが明らかとなった。

(1)　リーグ戦独特の雰囲気に飲まれない、選手個人およびチームとしての「経験」が必要である。

(2)　4年生がベンチコーチや応援ではなく、レギュラーとして出場し勝利に貢献することでチームを牽引することが必要である。

これらのことから、リーグ戦には独特の雰囲気があり個人戦以上に心理的重圧となりうる要素が多いが、それらを跳ね除ける個人およびチームとしての「経験」と、選手としてチームをまとめ牽引する4年生の働きが、リーグ戦における勝利を構成する要因となる可能性が示唆された。

今回のリーグ戦の最終結果として、優勝したNZ大学は第1部へ昇格し4位であったT大学は第2部に残留した。来年度は1部より降格してきたA大学を含めた4大学でリーグ戦が

争われるが、T 大学が今回の結果をどのように捉え来年度を戦うのか非常に興味深い。

また本研究は国内の大学レベルしかも東海地区の第 2 部という決して最高とは言えないレベルを対象としていることから、その意味には限界があると言わねばならないが、テニス競技の団体戦に関する資料が極めて少ないという点から意義を有すると言えるだろう。

参考文献

1. Kriese, C. : Coaching　TENNIS. Master Press, 1997.
2. 高橋仁大, 児玉光雄.：コーチングの実践を考える－本学テニス部の現状と課題－. 鹿屋体育大学学術研究紀要 24:35-41, 2000.
3. 松田岩男, 杉原隆. : 運動心理学入門. 大修館書店, 東京, 1987.